

認知的際立ちから見る Prepositional Phrase Construction と Double Object Construction

Prepositional Phrase Construction and
Double Object Construction :
from the Viewpoint of Cognitive Salience

森 光 有 子

は じ め に

これまでいくつかの「意味を変えない言い換え表現」についてさまざまな主張がなされ、論じられてきた。次の **Prepositional Phrase Construction** (前置詞 **to** あるいは **for** を用いた構文; 以下 **PPC**) と **Double Object Construction** (二重目的語構文; 以下 **DOC**) もそれらの一つである。

PPC : $X V NP_1 \text{ to/for } NP_2$

DOC : $X V NP_2 NP_1$

しかし、形が変われば意味も異なり、異なる意味・概念を表そうとすれば、それぞれに応じた形を用いると考えられる。

かつて拙稿 (森光 1983) で、**PPC** と **DOC** の構文間の関係について、主に NP_2 の機能の観点から論じたが、そこでの見方を援用し、さらに認知文法の観点からこれら 2 構造間の関係を捉え直したい。そして **PPC** と **DOC** の 2 構造間の「言い換え」を成立させている要因は何か、またいずれの構文も容認可能な場合、2 構造間の選択を決定づけているのは何か、ということについて論じていく。さらに、**DOC** の構造自体が持つ意味についても検討を加える。

1. PPC/DOC と NP₂ の機能

ここでは、森光（1983）での中心となる主張を簡単に述べておきたい。まず、PPC と DOC の構造間の関係を決定するのは主に NP₂ の果たす機能である。その際、NP₂ の持つ機能は（1）に挙げた 5 つ考えられなければならない。

- （1） a. pure goal
- b. ultimately goal
- c. ultimately goal+benefactive
- d. benefactive+deputive
- e. pure deputive

（a）の NP₂ が pure goal の場合は、この文の発話時には既に NP₂ が goal になってしまっている場合である。（b）の ultimately goal によって示されるのは、NP₂ が仮に今はまだその状態ではなくても最終的に goal になる事態である。（c）、（d）ではそれぞれ、ultimately goal と benefactive、benefactive と deputive、と 2 つの機能を併せ持つ NP₂ が示されている。（e）は NP₂ が完全な deputive の機能を持つ場合である。NP₂ がこれらのうちのいずれの機能を持つかが、PPC と DOC の構造を考える際の決定的要因になる。

NP₂ が最終的に goal になる場合（1 b: ultimately goal）はもちろんであるが、goal と benefactive の両方の機能を併せ持っている場合（1 c: ultimately goal+benefactive）、そして benefactive の解釈が残っている deputive の場合（1 d: benefactive+deputive）にも、PPC および DOC のいずれの構文も容認可能になる場合がある。

（2）（1 b の例）

- a. I gave a book to John.

b. I gave John a book.

(3) (1c の例)

a. John bought a drink for Mary.

b. John bought Mary a drink.

(4) (1d の例)

a. Mary cooked a meal for me.

b. Mary cooked me a meal.

このように、PPC と DOC のいずれの構文も可能な場合、2 構造間の選択を決定するのは、DOC の NP_2 が PPC の NP_2 より goal の度合いが強いということである。すなわち、 NP_2 が goal の意味合いを強く持っている場合ほど DOC が適切である場合が多いということである。

この主張の証拠となる顕著な例を見てみよう。例えば (5) および (6) の例における NP_2 , “Mary,” “me” の機能を考えてみる。

(5) a. John gave Mary a headache.

b.*John gave a headache to Mary.

(6) a. He taught a class for me.

b.*He taught me a class.

(5a) の文が発話される時点で、 NP_2 の “Mary” は既に “a headache” の goal になっている。従って、 NP_2 の機能は (1a) の pure goal である。このような場合、DOC 構文は容認可能であるが、(5b) に示されるように、PPC 構文は容認不可能である。一方、(6a) の NP_2 , “me” は pure deputive であり、goal の意味は全く含まない。このような場合には、PPC のみが容認可能であり、DOC の構造は容認不可能である。これらの例は、 NP_2 が goal の機能を顕著に示すと考えられる場合ほど DOC 構文が適切であり、逆に、 NP_2 の goal の機能が弱いほど PPC 構文が適切であるということを示している。

さらに、PPC と DOC の関係を考えると、PPC が基底構造で DOC

は PPC からの派生構造であるとする考え方が中心的であると思われる。しかし、NP₂の機能によって、PPC と DOC の両構造が可能な場合だけではなく、PPC か DOC のいずれか一方のみが可能な場合があることからも、PPC と DOC のいずれか一方を基底構造、もう一方を他方からの派生構造と捉えるよりも、それぞれの構造がそれぞれの必然性で存在していると考える方が適切だと思われる。

このように、NP₂の機能の面から PPC と DOC の 2 構造について論じたが、今回、この見方に認知文法の観点からの捉え方を加え、これら 2 構造間の関係について再度考えていく。

2. 認知的際立ちと構文選択

PPC と DOC の 2 構造間の選択を決定する要因を「認知的際立ち (cognitive salience)」の観点から捉え直してみよう。まず、実際の分析に入る前に、「認知的際立ち」の定義を見る。

Langacker (1991) は、文や句の中の最も際立ちの高い要素を「第一の焦点」とし、**trajector** (tr) と呼ぶ。そして、次に際立つ要素を「第二の焦点」とし、**landmark** (lm) と呼ぶ。**trajector** と **landmark** は文のレベル、句のレベル等に存在するが、文レベルでの **trajector**, **landmark** はそれぞれ、主語、目的語に相当する。文の主語は文を構成する上で不可欠な要素であり、最も義務性が高い要素と言える。義務性が高ければ、それだけ認知的際立ちも高くなると考えられるので、結果として、主語は「最も際立ちの高い要素」あるいは「第一の焦点」となる。そしてこの性質はすべての主語の事例に共通する性質であるスキーマである。

一方、目的語は主語ほど義務性は高くない。つまり、それだけ認知的際立ちも弱くなり、目的語は主語の次に認識される「第二に際立つ要素」あるいは「第二の焦点」となる。これは目的語のスキーマとして特徴づけられる。ある事態を概念化しようとする際、際立つ参加者 (**participant**) から順にアクセスすることが通常であることから、主語が最も際立つ要素あるいは第一の焦点、主語を経由して認識される目的語が第二に際立つ

要素あるいは第二の焦点となるのは自然なことであろう。

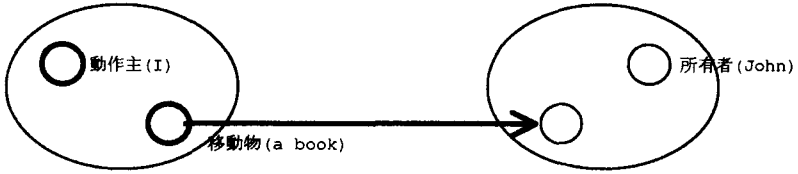
さて、第二に際立つ存在として位置づけられる目的語に何を選択するかが、PPC と DOC 間の選択を決定する。次の 2. 1 で、これら 2 構文間の選択に関して、認知的際立ちの観点から詳細に検討していくことにする。

2.1 PPC か DOC か (1)

従来、DOC と前置詞 *to* を用いる PPC の 2 構造間で「言い換え」の関係が成立するとされてきた。また、Langacker (1990) はこの「言い換え」の関係が成り立つためには、文が表す事態が「モノの移動」と「モノの所有」の両側面を含んでいなければならないと主張する。この主張をさらに強めるために、*to* を用いる PPC だけではなく *for* を用いる PPC をも観察の対象に入れ、さらに文の動詞が「移動」の意味を明示的に表さない例も含めて検討する。

まず、先に挙げた例 (2)、(3) を再度見てみよう。(2) では「私 (I)」が「ジョン (John)」に「本 (a book)」を「あげる (gave)」ことによって、「本」が「私」の元から「ジョン」の元に移動し、「本」は最終的に「ジョン」の所有物となることが表されている。つまりこの事態は、「私」から「ジョン」への「本の移動」と、本の移動が終了し「本」が「ジョンの所有領域に入っている」状態の 2 つの出来事の連鎖から成り立っている。例 (2 a) では「移動」の意味を含む前置詞 *to* があり、移動物 “a book” が第二の焦点である目的語の位置にあることから、2 つの出来事のうち「本の移動」に焦点が当てられていると考えることができる。一方 (2 b) では、所有者 “John” が目的語の位置に生じているため、「ジョン」が「本を所有」している状態に焦点が当てられていると考えられる。(2 a)、(2 b) における焦点化は、それぞれ図 1 (a)、(b) に示されるとおりである。

(a) (2 a: I gave a book to John.)



(b) (2 b: I gave John a book.)

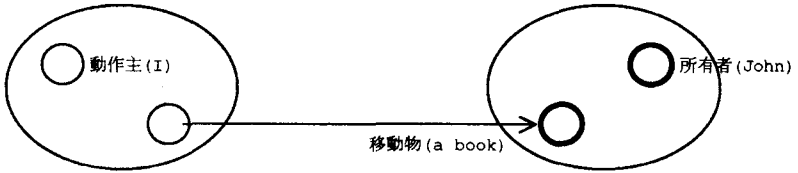


図 1

一つの事態の中から「モノの移動」と「モノの所有」のいずれの部分を取り出し焦点を当てるかは、話し手が事態をどのように解釈するかによって決定され、その解釈が何によって表されるかと言うと、それは構文や文法関係 (grammatical relation) によってである。すなわち、一つの事態の中から、第二に際立つ要素である目的語として何を選択するか、その事態を PPC で表すのか DOC で表すのかによって、話し手の事態解釈が示される。

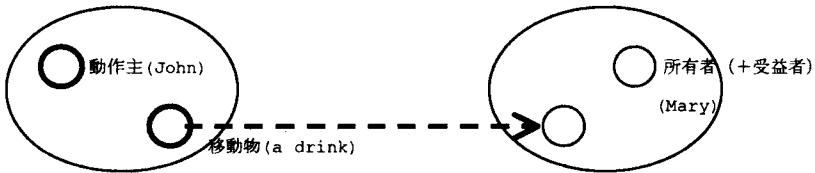
例 (3) では、PPC で用いられている前置詞は **for** である。この例で表されているのは、「ジョン (John)」が「メアリー (Mary)」のために「飲み物 (a drink)」を「買った (bought)」ことによって、その「飲み物」は「ジョン」の手から「メアリー」の元に届き、最終的に「メアリー」の所有するところとなった、という事態である。この事態も、例 (2) と同様、連鎖する出来事から成っている。つまり、「ジョン」が「メアリー」のために「飲み物」を買い、その「飲み物」が「ジョン」から「メアリー」の元に「移動する」出来事と、移動の終了した「飲み物」が「メアリーの所有領域にある」状態が連鎖して一つの事態を作り上げている。例 (3 a) では **benefactive** を表す前置詞 **for** があり、また移動物 “a

drink” が第二の焦点である目的語の位置に選択されている。従って、「ジョン」が「メアリー」のために買った「飲み物」が受益者「メアリー」の手元に「移動する」部分に焦点が当てられていると言える。一方 (3 b) では、所有者であり、かつ受益者である “Mary” が第二に際立つ要素である目的語として選択されている。故に、移動の終了した「飲み物」が「メアリーの所有物になった状態」に焦点が当てられていると考えることができる。

同じ一つの事態の中のどこに焦点を当てるかは話し手の事態解釈次第である。そしてその主観的解釈を表す手段は、構文選択、つまり目的語として何を選択するかである。

例 (3 a)、(3 b) における焦点化は、図 1 で表すことはできない。これはそれぞれ図 2 (a)、(b) のように示されるであろう。

(a) (3 a: John bought a drink for Mary.)



(b) (3 b: John bought Mary a drink.)

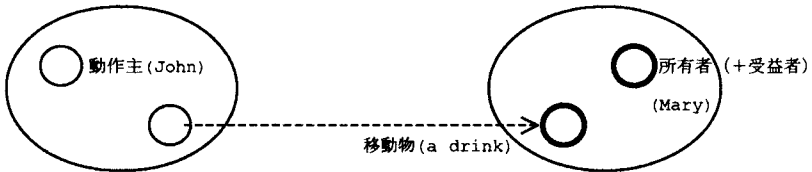


図 2

for は to と比較して「移動」の意味合いが弱い。for の後の名詞句は ultimately goal の意味も表すが、benefactive の機能も強い。この状態を示すために、図 2 に見られるように、for の場合には実線 (→) ではなく点線 (---→) を用いる。

例 (2) の場合も (3) の場合も、(a) と (b) の間の違いは、一つの事態の中から何を「第二に際立つ参与者」として焦点化させるか、つまり何を目的語として選択するかに基づいているが、この選択は話し手の事態解釈によって意図的になされているのである。話し手が主語の位置に生じる参与者の次に何を認識するかという認知的際立ちの側面が、目的語の選択に関わっているのである。さらに、次の例 (7)－(10) を見てみよう。

- (7) a. I sold the book to John.
b. I sold John the book.
- (8) a. John told something upsetting to Mary.
b. John told Mary something upsetting.
- (9) a. The committee sent an embarrassing letter to John.
b. The committee sent John an embarrassing letter.
- (10) a. I taught Greek to Harry.
b. I taught Harry Greek.

(7)－(10) の例はいずれも焦点化され得る下位事態を 2 つ内在させている。動詞としては *sell*, *tell*, *send*, *teach*、とさまざまな種類のものが生じている。*sell* と *send* はそれぞれ、売り手から買い手へ、送り主から受取り主への「モノの移動」を意味に含む。*tell* の場合には話し手から聞き手に言われたことが、*teach* の場合には教える側から教わる側に教えられたことが「移動」する。ただ、「移動」とは言え、*tell* と *teach* の場合は、*sell* や *send* の場合ほど「移動」の意味を明示的に表すとは考えにくいかもしれない。しかしながら、いずれの動詞の場合にも、何らかの形で「モノの移動」が下位事態の一つとして見出されると言えるであろう。この「移動」を表すのは (7)－(10) それぞれの (a) の文、すなわち PPC 構文である。そこでは前置詞 *to* が生じており、また移動するモノが目的語であるため「移動」が焦点化されるのである。そしてモノが移動すれば、それは最終的に NP₂ の所有物になる。ここに、もう一つの下位事態「モノの所有」が見出される。そして「所有」が焦点化されるのは、(7)－(10)

の (b) の文に見られるように、最終的所有者が目的語の位置に現れている構文 DOC においてである。

例 (8) において、「ジョン (John)」の言った何かを “upsetting” と感じているのは、(a) では「ジョン」自身である一方、(b) では「メアリー (Mary)」であるとする解釈がある。また例 (9) においても同様に、「手紙 (letter)」が “embarrassing” であるのは、(a) では「委員会 (the committee)」にとってであり、(b) では「ジョン (John)」にとってであるとする解釈がある。¹ しかし、いずれの解釈の場合にも、「狼狽させる何か (something upsetting)」あるいは「厄介な手紙 (an embarrassing letter)」が、(a) ではまだ移動中である状態が焦点化され、(b) では最終的所有者の所有領域に入った状態が焦点化されている、というここでの解釈と一致する。

例 (10) では、動詞として “teach” が用いられている。(a) では “Greek” が目的語の位置にあるので、「私 (I)」が「ハリー (Harry)」にまだ「ギリシア語 (Greek)」を教えている途中であり、「ハリー」はまだ「ギリシア語」を習得していない段階が焦点化されているが、一方 (b) では「ハリー」が目的語なので、「ハリー」は教えられたことを実際に学び、「ギリシア語」の知識を所有している状態が焦点化されていると考えられる。この解釈は次の例 (11) から確実なものとなる。

- (11) a. John taught the procedure to us in/for six weeks.
b. John taught us the procedure in/*for six weeks.

例 (11 a) で示されるように、「ジョン (John)」が「私たち (us)」に「手順 (the procedure)」を「6 週間 (以内) で (in six weeks) 教える (つまり、「移動」させる)」のも「6 週間の間 (だけ) (for six weeks) 教える」のも可能な場合には、前置詞 for も in も生起可能であるが、一方、(11 b) に示されるように、「所有」を焦点化する DOC 構文では、in は生起可能であるが for は容認不可能である。in の場合、「6 週間 (以内) で私たちに教えた (移動させた)」のであるから、「今は手順を既に私たち

のものとして得てしまっている」という意味が含まれる。故に、in は「所有」の意味と相容れる。しかし、for の「6 週間の間（だけ）」と「所有」は相容れない。故に、所有に焦点を当てた (b) の構造 DOC では for は容認されない。この例 (11) に見られる in と for の振舞い方は、DOC が「所有」の意味を持つことを明示していると言えよう。

さらに、次の 2 文も同様に説明される。

(12) a. Pass the salt to me, please.

b. Pass me the salt, please.

この 2 文は、厳密に言えば、使用される場面が異なる可能性がある。通常、食卓で用いられる場合には (b) の方が適切である。「塩 (the salt)」を「私 (me)」に渡してもらうことによって「私」は「塩を所有」することになる。では (a) はどのような場面で用いられるのであろうか。(a) は、たとえば、塩の小瓶をどう扱えばよいのかわからなくて困っている人に対して、「私に貸してみなさい」というような意味で使われる。つまり、「塩」は一時的に「私」の手元に移動してくるが、最終的には聞き手に渡る。(a) と (b) とでは、“me” の所有者としての程度に明らかに違いがあるのである。

以上、PPC と DOC の間の違いは、一つの事態の中から第二に際立つ要素である目的語として何を焦点化させるかの違いであることが示された。ここで取り上げてきた例のように、表されている事態が焦点化され得る 2 つの下位事態から成る複合的なものである場合には、いずれを焦点化させるかに応じて目的語の選択も 2 通り可能なのである。そして、何を目的語として焦点化させるかは、話し手が何をどのように認識し概念化するかという、話し手の事態概念の解釈の仕方、認知の仕方によって決定される。このような人間の認知の仕方、認知のプロセスが文法構造に反映されているのである。

2.2 PPC か DOC か (2)

2.1 で示されたことから、PPC と DOC の間の違いは NP₂ の「所有者」としての度合いの強さにあるとも言える。しかし、それだけではなく、(2) と (3) および (4) の間の違いのように、PPC における前置詞が *to* であるのか *for* であるのかの違いも、NP₂ がどれだけ強く「所有者」になっているかに依存していると言える。² 例えば、例 (3) の NP₂, “Mary” は移動物「飲み物 (a drink)」の最終的な「所有者」(あるいは *goal*) ではあるが *benefactive* な機能を併せ持っており、例 (2) の “John” とは「所有者」の強さの程度において明らかに違いがある。さらに例 (4) では、(a) で前置詞 *for* が用いられているように、“me” は *benefactive* と *deputive* の解釈を併せ持つ NP₂ である。最終的に “me” は “meal” を所有はするが (それ故に、(b) に示されるとおり DOC も可能であるが)、しかしそれ以上に *benefactive* と *deputive* の機能が強い。NP₂ の「所有者」の強さの程度は (3) の場合よりさらに弱い。

次の例 (13) は、これらの違いをより明確に示す。

- (13) a. John sent some chocolates to/for Mary.
b. John sent Mary some chocolates.

(a) に見られるように、PPC の場合、前置詞としては *to* も *for* も生起可能である。しかし、NP₂, “Mary” の機能は両者間で異なり、前置詞が *to* の場合には *ultimately goal* の、*for* の場合には *benefactive* の機能を持つ。(13 b) は (13 a) の「言い換え」表現であると言われるが、この「言い換え」は “Mary” が *goal* の機能を持つ場合にのみ成り立ち、*benefactive* の機能を持つ場合には成立しない。つまり、(13 b) の “John sent Mary some chocolates” は (13 a) の中の “John sent some chocolates to Mary” とのみ言い換えが成立するということである。“Mary” の機能が *goal* でなければ “Mary” は「所有者」にはなれないのである。

このように、NP₂ の機能が *ultimately goal* か *ultimately goal* と *benefactive* の機能を併せ持っているのか、あるいは *benefactive* と *deputive*

の機能を併せ持っているのかに応じて、NP₂の「所有者」としての度合いの強さが決まり、前置詞も決定される。

ここまでは、PPC と DOC のいずれもが可能な場合の構文選択と、また PPC 構文の場合に *to* と *for* のいずれが選択されるかということとに、NP₂の「所有者」の度合いが関わっていることを見てきた。しかし、考えられるケースはこれだけではない。例 (14) および (15) を見てみよう。

- (14) a. John gave Mary a headache. (=5 a)
 b.*John gave a headache to/for Mary.
 c. The movie gave me the creeps.
 d.*The movie gave me the creeps to/for me.
- (15) a. He taught a class for me. (=6 a)
 b.*He taught me a class. (=6 b)
 c. Mary wrote my essay for me.
 d.*Mary wrote me my essay.

(14) の (a)、(c) では、それぞれの NP₂, “Mary,” “me” は *pure goal* と言える。文が発話される時点で “Mary” と “me” は完全なる *goal* になってしまっている。このような *goal* は *ultimately goal* と区別されなければならないし、また純粋な *goal* であるので「所有者」としての度合いは最も強い。(a) の「頭痛 (a headache)」および (c) の「ぞっとする感じ (the creeps)」は、それぞれ「ジョン (John)」と「映画 (the movie)」が原因で「メアリー (Mary)」と「私 (me)」の「所有」するところとなったのであって、「ジョン」と「映画」から「移動」してきたのではない。従って、この状況は図 1 によっても図 2 によっても表されない。図示するとすれば、次の図 3 のように表されるだろう。

(14 a: John gave Mary a headache, および

14 c: The movie gave me the creeps.)

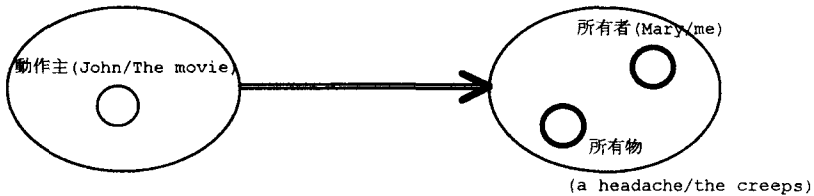


図 3

図 3 の⇒は主語名詞句から NP_2 に向かって力が働き、主語名詞句が NP_2 に何らかの作用を引き起こす原因であることを示す。主語名詞句は NP_2 が NP_1 を所有する原因であって、主語名詞句から NP_2 に何かが移動したのではない。つまり、これらの事態には「モノの移動」が下位事態として見出されず、故に「移動」を焦点化することはできないのである。このように、 NP_2 が NP_1 の完全なる「所有者」で、移動の意味が全く表されない場合 (pure goal) には、「モノの所有」に焦点を当てた DOC のみが容認可能であり、(14) の (a)、(c) それぞれの PPC 形である (b) と (d) はいずれも容認されない。

例 (14) とは逆に、PPC のみが容認可能となるのが例 (15) である。(15 a) の NP_2 , “me” と (15 c) の NP_2 , “me” はいずれも純粋な *deputive* である。goal の機能を全く持たない NP_2 , “me” は決して「所有者」として焦点化されることはない。従って、このような場合には PPC のみが容認可能な構造となり、(b) および (d) に示されるように、DOC は容認不可能となる。

2.1 および 2.2 から、PPC と DOC 間の選択、つまり、動詞の目的語として事態の何を焦点化させるかという決定、また PPC 構造における前置詞 *to* と *for* 間の選択には、 NP_2 の機能および「所有者」としての度合いの強さが関わっていることが示された。

3. DOC と所有関係

2で、DOCの構文はNP₂がNP₁の「所有者」である状態を焦点化した場合に選択されるということを見てきたが、なぜDOCに「所有」の意味があるのでしょうか。DOCと「所有」の意味のつながりはどこにあるのであろうか。

前述のとおり、形が変われば意味は異なり、我々は異なる意味・概念を表そうと思えばそれぞれに応じた形を用いる。形自体が意味を持ち、意味を表すのである。PPCの場合には前置詞toあるいはforが用いられるため、構文に「移動」の意味や「受益」の意味等が生じてくると考えられるが、これらのような明示的な要素が存在しないDOCについてはどのように考えればよいのであろうか。

Langacker (1993) は所有を「参照点構造 (reference-point construction)」から特徴づけている。ある事態を概念化する際、我々は通常、まず最も際立つ参与者である主語にアクセスし、その主語を事態全体を概念化する際の「参照点 (reference point)」として第二に際立つ参与者の目的語にアクセスする。同様に、例えば“John’s father/car/book”のような所有表現においては、所有者“John”にまず焦点が当たる。この焦点は事態を概念化する際の参照点となり、我々はその参照点を経由してtargetである「所有物」—今の場合、father/car/book—に認識を移すのである。

このように、所有という概念はこの「参照点 (構造)」で説明される認知の仕方を反映している。従って、所有関係を表す場合に、例えば“John’s book”のようにその関係を明示的に表す要素がなくても、「所有者+所有物」という配列で示すことも可能となる。次の(16)はルイセーニョ語 (Luiseño) の例である。

- (16) a. noo=p no-te? tiiwu-q
 I=3 s my-stomach hurt-TNS

‘I have a stomach ache.’

b. noo=p no-puuš konokniš

I=3 s my-eye green

‘I have green eyes.’

(Langacker 1993)

(16) の (a)、(b) は “double-subject” construction の形を持つ文である。“=p” (subject-agreement clitic) に先行する NP, “noo” も後続の NPs, “no-te?” あるいは “no-puuš” もいずれも主語の名詞句であるが、これら 2 つの主語を隣接させるという構造上の手段によって、2 語間の「所有者+所有物」の関係を示しているのである。最初の主語名詞句 “noo” が第一の焦点であるが、これが参照点となり、直後の主語名詞句 “no-te?” あるいは “no-puuš” にアクセスする。2 つの主語名詞句間の関係を明示する文法標識はないが、参照点構造により、2 つの名詞句が「所有者+所有物」の関係を示すことが表される。

語の配列によって所有者・所有物の関係を示すという方法は、英語の “double-object” construction (DOC) にも当てはまると考えられる。DOC はルイセーニョ語の例と異なり、目的語の NP が隣接している構造であるが、参照点構造により 2 つの名詞句間の所有関係が示されるのは同様である。我々はまず NP₂ に焦点を当てるが、これを参照点として経由し、target である NP₁ にアクセスする。このように、DOC における 2 つの目的語名詞句の語順は参照点構造を反映したものであり、この語順、つまり DOC それ自体が所有関係を表すのである。

4. おわりに

本稿では、意味を変えない「言い換え」表現と従来言われてきた Prepositional Phrase Construction と Double Object Construction を取り上げ、両構造の関係について考えてきた。その結果、まず、この 2 構造間で「言い換え」が成り立つためには、表そうとする事態が 2 つの焦点化され得る下位事態を含んでいなければならないことが示された。我々は表

そうとする内容に応じて構文を選択するので、2つの構文が可能であるということは表そうとする事態が2つの下位事態を内在させる複合的事態であるということである。

PPC と DOC が関係する場合、内在する2つの下位事態は「モノの移動」と「モノの所有」であり、そのいずれが焦点化されるかによって PPC あるいは DOC が選択される。いずれを焦点化するかは話し手の主観的な事態解釈の仕方、事態の認知の仕方による。話し手がある事態の中から最初に認識するものが最も際立つ参与者となり、それは主語の位置を占める。話し手が次に認識するものが第二に際立つ参与者として目的語の位置に選ばれる。そして、話し手が文の主語として、また目的語として事態の中の何を選び、事態全体をどう概念化するかが文法関係を決定する。今の場合、事態の中の「モノの移動」が第二に際立つ要素として焦点化された場合には PPC が、「モノの所有」が焦点化された場合には DOC が選択される。

しかしながら、DOC と「所有」の意味の関係は一樣ではなく、所有の意味の強さはさまざまである。その差は、NP₂の機能——pure goal/ ultimately goal/ultimately goal + benefactive/benefactive + deputive/pure deputive——に依存し、NP₂の goal の機能が強いほど「所有者」の度合いが高いことが示された。

PPC と DOC 間の選択、および PPC における前置詞の選択を決定するのは NP₂の機能、所有者としての度合いの強さであることが示されたが、それに加えて、なぜ DOC が「所有」の意味を持つのかということに関して、構文の意味が検討された。そして、所有は「参照点構造」から特徴づけられ、DOC の2つの目的語名詞句の配列自体が「所有関係」を表していることが示された。

従来、文法関係は純粋に統語的概念とされてきた。しかし、認知言語学では、話し手が一つの事態をどのように解釈し概念化するかということが「意味」に含まれ、その話し手の事態解釈を表すために文法関係が決定される。何を主語にし、何を目的語にするか、どのような構文を選択するかを決定しているのは認知的際立ちであり、話し手が事態を概念化する際、

最も際立つ参加者からどのような順序で認識していくかが文法関係の基盤となる。人間の一般的な認知のプロセスが文法構造に反映されているということなのである。

注

¹ 坪本 (1980) および Kuno and Kaburaki (1977) の議論を参照。また、森光 (1983) のこれらの議論に対する主張も参照。

² 例 (2)、(3) および (7)–(12) における (a) と (b) の間の違いを、森光 (1983) では NP₂ の goal の度合いの強さで説明したが、これは、言い換えれば、NP₂ の「所有者」としての度合いの強さであるとも言えよう。

参考文献

- Erteschik-Shir, N. (1979) "Discourse Constraints on Dative Movement," *Syntax and Semantics* 12. Academic Press.
- Hawkins, R. (1981) "On 'Generating Indirect Objects in English': a Reply to Allerton," *JL* 17.
- Kuno, S. and E. Kaburaki (1977) "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- . (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2. *Descriptive Application*. Stanford University Press.
- . (1993) "Reference-point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4.
- . (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- 森光有子 (1983) 「Prepositional Phrase Construction と Double Object Construction に関する若干の考察」 *Queries* 20. 大阪市立大学大学院英文学研究会.
- 中村芳久 (編) (2004) 『認知文法論 II』大修館書店.
- 坪本篤朗 (1980) 「有標の位置と含意」『英語学』21. 開拓社.